

# 古典教育における「比べ読み」学習の意義

## — 『徒然草』137段(「花は盛りに」)の授業実践を例に—

武久 康高 (高知大学)

### Significance of "comparative reading" learning in classical education: As an example of a classes of "Tsurezuregusa" (in the chapter 137)

Yasutaka Takehisa (Kochi University)

#### 要 約

本稿では、「古典に表れた様々な思想や感情を的確にとらえ」、自らの「ものの見方、感じ方、考え方を豊か」にしうるような古典学習の在り方として、テキストを読み比べる学習が有効であることを論じる。具体的には『徒然草』「花は盛りに」と、そこでの「筆者のものの見方」を育んだ文化的社会的状況が窺える資料とを読み比べ、共通点等をグループで話し合う。そのことによって、「花は盛りに」のみからは把握できない「筆者のものの見方」の特徴について「的確にとらえる」こと、さらに学習者が「花は盛りに」と自らの価値観との共通点や相違点について理解し、「ものの見方、感じ方、考え方を豊か」にしていくこと、以上を目的とした授業実践例を示し、成果を検証する。

キーワード：古典教育、比べ読み、『徒然草』「花は盛りに」

#### 1 問題設定

高等学校における「古典」の指導事項の一つに、「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること」がある（『高等学校学習指導要領』国語「古典B」2内容(1)ウ）。この指導事項について、『学習指導要領解説 国語編』は次のように解説している。

古典には、書き手や文章中の人物の「人間、社会、自然などに対する思想や感情」が、書かれた時代や環境の違いによって、様々に表現されている。そうした思想や感情には、現代にも通じ、生徒からみて共感できるものや、逆に、違和感を覚えたり理解が難しかったりするものもある。また、優れた洞察力や創造性に感動するものなどもある。そのいずれであっても、古典に表れた様々な思想や感情を的確にとらえることは、生徒の「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること」につながる。

つまり、高校生の「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」学習とは、「古典に表れた様々な思想や感情」（「現代にも通じ、生徒からみて共感できるもの」、「違和感を覚えたり理解が難しかったりするもの」、「優れた洞察力や創造性に感動するもの」など）を「的確にとらえること」から生まれると述べているのである。だが、現代とは異なる社会的文化的環境で生まれた古典の「思想や感情」について、教材とされた古典の一部（及びその箇所注）のみから高校生が「的確にとらえる」ことはなかなか困難なことである。結果、生徒たちは現代的な価値観に基づき「古典に表れた様々な思想や感情」を捉えてしまい、彼らの認識の拡充や更新といった段階にまで至らないケースが多いと言えよう。

そうしたなか本稿が目指したいのが、学習指導要領でも例示されている「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べる」（「古典B」2内容(2)イ）言語活動である。このうち「同じ時

代の記事]、特に「筆者のものの見方」を育んだ文化的社会的状況が窺えるテキストと古典教材とを読み比べる活動は、古典作品が成立したコンテクストについての理解を深めることにもなるため、現代の高校生が古典の「思想や感情」を「的確にとらえる」学習としては有効なものだと考えられる。

そこで本稿では、『徒然草』137段（以下、「花は盛りに」と記す）の学習を通して生徒が「古典に表れた様々な思想や感情を的確にとらえ」、自らの「ものの見方、感じ方、考え方を豊か」にしうるような古典学習の在り方について論じる。具体的には、(1)「花は盛りに」の教材価値を、現代とは異なる「筆者のものの見方」の特徴が窺えるところに見出し、その特徴の具体的な内容を論じる。(2)「花は盛りに」と補助資料（「筆者のものの見方」を育んだ文化的社会的状況が窺える資料）とを読み比べ、グループで共通点等を話し合う活動を通して、「花は盛りに」のテキストのみからは把握できない「筆者のものの見方」の特徴について「的確にとらえる」学習の実例、さらに学習者が「花は盛りに」と自らの価値観との共通点や相違点について理解することで、彼らの「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」学習の実例について提示する。(3)授業実践を通じての成果と課題について述べる、という形ですすめて行きたい。

## 2 教材及び教材価値

【教材】『徒然草』「花は盛りに」は、『徒然草』で最も長い章段である。そのためであろうか、「花は盛りに」を載せているほとんどの教科書では全文ではなくその一部のみが掲載されている。本稿では、冒頭部分から「春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも、思へるこそ、いと頼もしく、をかしけれ。」までを教材とする。

【教材】花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、「障ることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふ習ひは、さることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。

よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。男女の情けも、ひとへに逢ひ見るをば言ふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ。

望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、暁近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見える、木の間の影、うちしぐれたる群雲隠れのほど、またなくあはれなり。椎柴・白樫などの、濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなど、都恋しう覺ゆれ。

すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも、思へるこそ、いと頼もしく、をかしけれ。

【教材価値】本章段の冒頭部分について、三木紀人は以下のように述べている<sup>(1)</sup>。

冒頭は、花と月への接し方に例をとり、想像力によって情趣を味わうべきことを説く一節である。反語や「こそ」などによる強調がこの段に多用されるが、その特徴がはやくも見て取れる。

その力説は、美への従来の一面的な観照法が一面的であることへのいらだちから来たものであって、満開の桜やくまなき名月をないがしろにする説ではない。

三木は冒頭部分を、「想像力によって情趣を味わうべきことを説く一節」とまとめている。確かに、

「雨に対ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬ」ことを「なほあはれに情け深し」と評し、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」や「障ることありてまからで」といった詞書を「花を見」ることに「劣れることかは」と述べるところからは、花や月を見ることで感じられる情趣と、直接見えない花や月の姿を想像することで味わう情趣とが、本章段では同等のものとして位置付けられていると言えよう。また、「咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ」（＝開花前や散った後の桜に思いを寄せるといった、満開時を想像した上での「待ち遠しさ」・「(変貌してしまったことへの)はかなさ」から生まれる情趣）や「花の散り、月の傾くを慕ふ習ひは、さることなれど」（＝散る桜や西に傾く月を愛惜するといった、消滅を想像するところから生まれる名残惜しさ）なども、「想像する」といった心の働きによって情趣が生まれることを示す語りであると指摘できる。

このように、冒頭部分では「想像力によって情趣を味わうべきこと」が説かれていると捉えるとき、本教材の末尾部分はそのまとめの部分に当たると言える。ここではまず、「総じて」の意である「すべて」という語が用いられており、この一文がそれまでの叙述を総括した箇所であることが窺える。そしてここでは、春は家の中から花の姿を、夜は寝室の中から月の姿を「思へる」ことこそが、大層「頼もし」く「をかし」とまとめられているのである。ちなみに「頼もし」とは、「相手が自分の力になってくれると信じられる状態。相手のことが信頼できる。」（大野晋編『古典基礎語辞典』）という意である。つまりここでは、目で「見る」のではなく「思へる」といった行為「こそ」、自分にとって信頼できる行為だとまとめられているのである。

以上、本教材の冒頭部分とまとめの部分を取り上げたが、そこでは「月や花の情趣は、「目で見る」よりも「想像する」ほうがより豊かに味わうことができる」ということが語られていた。では、「花は盛りに」が述べる、見ることに優越する「想像力」とは具体的にはどのようなものなのだろうか。次項ではそれについて、「花は盛りに」と同様の「ものの見方」が窺える正徹及び藤原定家の資料をもとに考えたい。

\*

『徒然草』について言及する文章は、成立から百年以上経った室町時代以降のものしか残っていない。そこでは「花は盛りに」が、歌人である正徹によって次のように評されている。

「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。」と兼好が書きたるやうなる心根を持ちたる者は、世間にただ一人ならでは無きなり。  
（『正徹物語』）

正徹は、「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。」を例に挙げ、こうした美意識を持った兼好の「心根」を称賛している。しかしこの文章についての言及は以上であるため、正徹が兼好のどのような美意識（「心根」）を特に評価しているのか、具体的にはよく分からない。そこで次に、正徹の歌風（美意識）について探っていきたい。この点について藤平春男と佐佐木幸綱は、正徹の「海山はただ面影ぞ見しかたの暮れゆくまに目路はたゆれど」をもとに、以下のように発言している<sup>(2)</sup>。

**藤 平** 正徹が詠おうとする世界はいつも（中略）生の自然そのものでない幻覚の世界に浮かんできた自然ですね。（中略）そのいい例でもう一つ、巻十四にある歌です。

海山はただ面影ぞ見しかたの暮れゆくまに目路はたゆれど

これは、「海や山の光景はひたすら目に浮かぶ映像として生きている。眺めていた海や山は、日が暮れてゆくにつれて全く見えなくなった。現実に見えていた海や山は見えないが、しかしそれらは、実は現実に見えなくなったとき、面影としてほんとうの美しさが生きはじめた」ということなんですね。そういう世界を歌でとらえ得るのだということを何で知ったかという、定家を知り、『新古今集』を熟読して、短歌という表現形式がそういう世界をとらえ得ることを知ったのだと思います。

佐佐木 想像力を作歌の方法の中核に据えたのが、文学史的に見ての定家の偉大さと言ってよいのですが、たしかにおっしゃるとおり、正徹は、定家のその辺りを意識的に継承しようとしているところがある。彼も日常的な目玉を信用していない。個人における現実体験の限界を知っていた。  
 (「比べ読み」資料 A「正徹の世界」の一部)

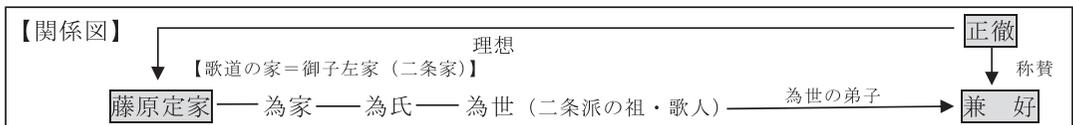
正徹が定家の歌を理想としていたことは『正徹物語』からも窺えるが(「この道にて定家をなみせん輩は、冥加もあるべからず、罰をかうむるべき事なり。(中略)叶はぬまでも定家の風骨をうらやみ学ぶべしと存じ侍るなり」など)、ここでは「想像力」を中核に据える定家の作歌の方法について、正徹が「意識的に継承しよう」としていると言及されている。では、正徹が継承しようとした藤原定家の方法とはどのようなものだったのだろうか。前掲の藤平は別の論文で次のように述べている<sup>(3)</sup>。

定家には、自我の確立された近代人の、自由な批判精神や科学的精神を濾過した広く深い想像力によるイメージの創造は望むべくもなかった。彼は「常に古歌の景気を観念」して、それによって得られた映像を組み合わせ「人の未だ詠まざるの心を求めて之を詠む」ことを力をこめて説いたのである。それはすぐれた形成力によって成功した場合、彼ら貴族の憧憬する王朝的優艶美の世界を観念の世界に出現させえたのであり、それゆえにその時代を支配する方法となりえたわけであった。

“常に古歌の景気を観念”して、それによって得られた映像を組み合わせ「人の未だ詠まざるの心を求めて之を詠む」ことを説いたとあるように、定家の場合、和歌の伝統を学ぶ(=古歌を記憶する)ことで身に付けた和歌的表現や美意識を「想像力」の源泉とし、そこから「王朝的優艶美の世界」を一首のうちに形成することを目指したのである。以下、定家の代表歌の一つ「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮」(『新古今集』)について説明した文章を引用しよう<sup>(4)</sup>。

中世の文化の中心は和歌でした。貴族(公家)も僧侶(寺家)も、そして武士(武家)も和歌を詠むのです。和歌は藤原定家の歌がそうであるように、実際に見た風景など詠みません。古い歌(古歌といいます)の言葉を新たに組みなおして和歌に仕立て上げるのです。これはもう『古今集』の時代からその傾向がありましたが、中世に入ってから、ほぼそうになりました。定家も一人海岸に立ってあの歌を詠んだのではなく、『源氏物語』明石巻の一節や、「春秋はすぐすものから心には花も紅葉もなくこそ有りけれ」(『貫之集』紀貫之)、「春は花秋は紅葉とちりはててたちかくるべきこのもとなし」(『拾遺集』よみ人しらず)を思い出しながら、詠んでいるのです。つまり、現実の風景よりも和歌で詠まれた幻想の風景の方が、彼らにとっては価値があり、リアルなものだったということです。  
 (「比べ読み」資料 B「藤原定家の世界」の一部)

正徹が継承しようとした藤原定家の方法とは、現実に見えている風景をそのまま歌に詠むのではなく、古歌の記憶を基盤とした「想像力」を通じて生まれた幻想の風景を和歌世界に造形していくことであった。ちなみに【関係図】のように、兼好の師匠である二条為世(二条派の祖)は定家の孫である為氏の子であることから、こうした定家の歌風は兼好も理解していたと考えられる。



以上の分析をまとめる。『徒然草』「花は盛りに」では、月や花の情趣について、「目で見る」ことよりも「想像する」ことのほうがより豊かに味わうことができるとされていた。しかし、その「想像力」の内実についてテキスト上では語られていなかったため、『徒然草』「花は盛りに」を評価している正徹、及び正徹が理想とした定家が重視した「想像力」の在り方について検討した(彼らは「花

は盛りに」と同様の「ものの見方」をしている)。結果、こうした「想像力」の源泉には「古歌の記憶や古歌に対する知識を基盤として生まれる美意識」があることが窺えた。つまり彼らは、和歌的な美意識に基づく「想像力」によって生まれる情趣世界こそ、「目で見る」情趣世界に優越すると述べているのである。

こうした美意識と、鎌倉時代とは比べものにならないほど「目で見る」範囲が拡大し(望遠鏡、顕微鏡、最近ではドローンの開発など)、さらにはデジカメやスマホの普及によって、そうした“拡大した「見る世界」”を手軽に手に入れられるようになった現代人の“「見ること」至上主義”とも言える美意識とは、大きく異なるものだと言える。しかし、このように全く異なるからこそ、「比べ読み」を通じて現代の価値観や美意識の特徴に気づき、それを対象化することも可能になると考える。ここに『徒然草』『花は盛りに』の教材価値を見出したい。

### 3 授業の実際

以下、先の教材価値に従い、稿者の勤務校で行った授業について報告する。

【授業名】日本文学講読(高知大学教育学部3・4年生)

【日時】《第1時》2017年10月19日(木) 3限、《第2時》10月25日(木) 3限

【内容】《第1時》

本文の内容を一通り押さえた後、次の課題を学生に提示した。

【室町時代の『徒然草』読者が称賛する兼好の美意識とは、一体どのようなものでしょうか。それは現代の我々の感覚とは異なるものなのでしょうか】

●『徒然草』に言及する文章は、成立から百年以上経った室町時代以降のものしか残っていません。ここでは「花は盛りに」が、歌人・正徹によって次のように評されています(現代語訳で示します)。

兼好が「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。」と書いたような心性を持った者は、世間には他にただ一人もいない。こういう心性は生まれつきのものである。(『正徹物語』)

正徹は、「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。」を例に挙げ、こうした美意識を持った兼好の「心性」を称賛しています。しかし、この文章についての言及は以上であるため、正徹が兼好のどのような美意識(「心性」)を特に評価しているのか、具体的にはよく分かりません。そこで、

【問】①正徹の和歌の特徴について述べた文章A、およびその正徹が理想とした藤原定家の和歌の特徴について述べた文章Bを読み、その特徴を捉えましょう。【※文章A・Bは論文末に掲載】

【考えるための手引き】

- ・文章A・Bで述べられている特徴を、それぞれ「××ではなく○○」の形で整理してみましょう。
- ・「××ではなく○○」の「○○」の部分をもとに「花は盛りに」との共通点を考えてみましょう。

②①で捉えたA・Bの特徴が「花は盛りに」の特にとどの部分から読み取れるか考えましょう。

③①②から室町時代の読者である正徹が兼好を評価した理由について考えましょう。

①②③について個人で考えさせた後、3～4人のグループに分かれて話し合わせた。その結果、①では次のような意見が出た。

A【特徴】外側の世界ではなく心の中にとらえた世界／現実で見えるときではなく現実に見えなくなったとき

B【特徴】現実に見えている風景ではなく自分の心の中の世界／現実の風景ではなく和歌で詠まれた幻想の風景

A・Bと「花は盛りに」の【共通点】目に見える自然や体験する現実ではなく想像や幻想／現実にある風

景を写實的に表現するのではなく、想像力をはたらかせることにより、自分の心の中に想起される幻想の風景に美しさを感じるという特徴／目に見えるものから感じる情緒だけがすべてではないと考えている点

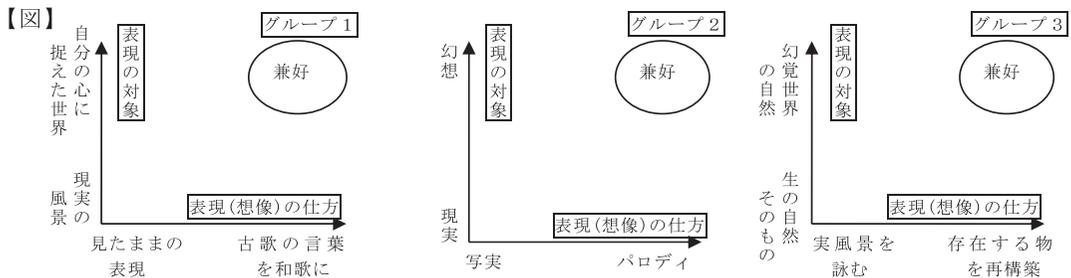
ここからは、学生たちが[A]・[B]と「花は盛りに」との共通点について、「目に見える美ではなく想像による幻想世界の美を重視している」点に見ていることが窺える。

### 《第2時》

前時の発表（【問】①）から学生たちは、複数テキストとの読み比べを通じて、「花は盛りに」の「ものの見方」の特徴を理解していることが窺えた。だが一方で、「花は盛りに」に見られる「想像力」の基盤（「想像力」の基盤は「花は盛りに」では語られておらず、教材本文だけを読んでいても分からない）には、[B]で書かれているような古歌の知識・記憶がある”ということには気付いていないことが分かった。そこで本時ではまず、次のような問いを出し図表に整理させた（個人作業→グループ活動）。

【問1】先週の話し合いから、[A]・[B]と「花は盛りに」との間には共通の美意識があることが分かった。では、「花は盛りに」では言語化されていない美意識の特徴について、[A]・[B]の記述から考えてみよう。  
●[A]・[B]が良しとしている「表現（想像）の仕方」をX軸に、[A]・[B]が良しとしている「表現の対象」をY軸にして、そこに兼好の「ものの見方」（「花は盛りに」）を位置づけよう。

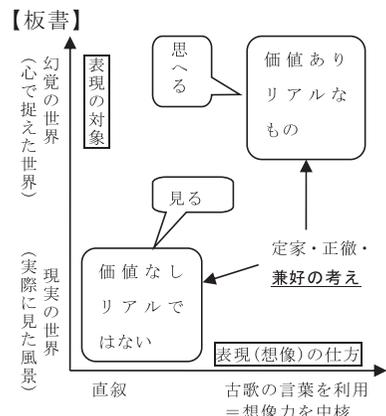
各グループは話し合いの結果を【図】のように整理し、「花は盛りに」では言語化されていない「想像力」について「和歌の伝統を学ぶことで身に付けた和歌の表現や美意識が基盤にある」と指摘していた。なお、この話し合いでは、情報を可視化して整理する方法が有効に機能していた。



次に、前時の【問】②について発表させた後、以下の問いを出した（個人作業→グループ活動）。

【問2】みなさんが【問】②の答えに挙げた部分「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものか。春は家を立ち去らでも、月の夜は闇のうちながらも、思へるこそ、いと頼もしう、をかしけれ。」のうち、特にどの部分（単語や文法の使われ方）に着目すれば、[A]・[B]の特徴との共通点をうまく説明できるだろうか。

「比べ読み」を通じて検討してきた「筆者のものの見方」の特徴を、本文の叙述の仕方（文法など）に即して説明させる課題である。学生からは「『をば』（強調）『か』（反語）によって『さのみ目にて見る』だけではないことを強調している」や、



「『こそ』によって『思へる』ことを強調し、その価値を高めている」などの意見が出た。【問1】【問2】を踏まえ、上のような【板書】を行った。

最後に、学生たちには次の宿題を課した。

【宿題】室町時代の読者・正徹が称賛する兼好の美意識の特徴をまとめ、そうした美意識について、我々の自然についての美意識と比較しつつ意見を述べてください。

【評価の観点】 以下の観点がどれぐらい達成されているかをもとに評価します。

◆正徹が称賛する兼好の美意識の特徴

◇文章[A]・[B]を使う理由が明示されている。／◇文章[A]・[B]から読み取れる複数の観点をもとに、「花は盛りに」の本文を使って具体的に説明している。

◆自分の意見

◇自分の経験や知識から「我々の自然についての美意識」の例が挙げられている。／◇現代の美意識と兼好の美意識との共通点あるいは相違点が明示された上で、兼好の美意識に対する自分の意見が述べられている。

《考えるための手引き》◇我々は自然の美しさをどのような時に感じるだろうか。／◇スマホやデジカメの普及と自然に対する我々の美意識とは、なにか関係があるのだろうか。

授業では、グループでの読み比べ学習を中心に「花は盛りに」における美意識の理解をすすめたため、レポートの前半の課題では、「花は盛りに」の美意識の特徴についてそれぞれまとめさせた。これは授業内容についての各個人の理解の程度を評価するためである。そこで学生たちは、全員、文章[A]・[B]と「花は盛りに」の本文を例に挙げつつ、美意識の特徴を的確に説明していた。本授業の目的の一つに、『徒然草』「花は盛りに」と複数のテキスト（筆者のものの見方）を育んだ文化的社会的状況が窺える資料）とを読み比べ「筆者のものの見方」の特徴について「的確にとらえる」ことがあったのだが、今回の授業において叙上の目的は概ね達成されたとみてよい。また、今回は学生に評価の観点を示し、その上で内容をまとめさせた。この方法は、レポートを書く際にどのような観点が必要なのかを学生たちが自覚化することにも繋がり、非常に有効な方法であると考えられる。

レポートの後半の課題では、自分と「花は盛りに」との価値観の相違を理解することで、彼らの「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」ことが目指されている。この課題について多くの学生は、「【現代】現実の風景を見ることで感じる美／【兼好】見えない風景を想像することで感じる美」という図式で両者を整理し、違いの理由については「想像力の衰え」や「技術の進歩による美意識の変化」、「見えないものを評価する習慣がなくなったため」などとしている。これらの意見は「花は盛りに」と現代の価値観との相違を説明するものではあるが、ここから“本授業を通じて学生たちの「ものの見方、感じ方、考え方」が豊かになっている”と判断するのは些か難しいと考える。

その一方で、本課題を通じて自らの認識の仕方を対象化するようなレポートも見られた。

【学生レポート例】私は、この兼好の美意識は、変容しているところもあるが現代の自然に対する美意識と共通していると考える。(中略) 富士山が美しいのは例えば晴天のものと富士山であり、曇天で雲がかかっている富士山にあまり美しさを感じないと大半の人は考えるだろう。実際、旅番組で山などの風景を紹介する際、撮影した日が曇天や雨天であれば、「晴天の日にはこんなに見える」という映像を流す。これも、現実世界そのままが美しいのではなく、まず「美しいと感じられる風景」を想起しながら、それに合った現実が美しいという意識があるからであり、この想像の世界に美意識がある点において、兼好と共通していると考える。

このレポートでは、一見すると対照的な現代の美意識と兼好の美意識とが、どちらも「美しいと感じられる風景」を想起し（現代であればマスコミにすり込まれたイメージ、兼好の時代なら和歌世界で作られ上げられたイメージ）、そのイメージにそった風景にこそ美を感じているという点で同様であることを論じている。こうした意見は、「古典に表れた」「思想や感情」を当時のコンテキストを踏まえつつ「的確にとらえ」た結果、現代の我々が風景を美しいと感じる、その日常的な認識の在り方についても捉え返すことが可能になったものと考えられる。このように古典の「比べ読み」学習の結果、「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」学生も少数ながら存在した。

#### 4 成果と課題

まずは本論文の成果を述べる。「花は盛りに」における「筆者のものの見方」の特徴については、これまで“満月や満開以外の月や花の様子にも情趣を感じているところ”と解釈されることが多かった。むろんこの解釈は間違いではないのだが、注意しなくてはならないのは、この一文中に“満月や満開以外の月や花の様子を眺めることにも情趣を感じている”のように、無意識のうちに「眺めること」という一節を含み込んで解釈してしまう恐れがあることである。こうした背景には、映像化された“傾く月”や“落花”の情趣を視覚的に賞美するといった、現代の「一般的」な美意識の存在が指摘できよう。こうした美意識の存在に留意しておかないと、授業後の感想で生徒から“私も兼好のように、満月ではなく傾く月を眺めることが好き”といった感想が出てくることになる（むろんこの生徒は、現代の「一般的」な美意識のもとに「筆者のものの見方」を捉えている）。そもそも生徒たちは、「眺めて」賞美する以外に「月や花の美を愛する方法」があるなど、授業で扱わない限り想像すらないだろう。そのため、自分にとっての常識的な理解で「古典に表れた様々な思想や感情」を判断してしまうのである。しかしこれでは、彼らの認識の拡充や更新などとても望めまい。

一方、稿者は『徒然草』「花は盛りに」の教材価値を、「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものか。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも、思へるこそ、いと頼もしう、をかしけれ。」などの表現から、“目で見る”ことに対する「想像する」美の優越を語るところ”に置いた。そして授業では、そうした「筆者のものの見方」を育んだ文化的社会的状況が窺える複数のテキスト（文章㉔・㉕）と「花は盛りに」とを読み比べることで、現代とは異なる叙上の美意識（「筆者のものの見方」が古典世界には見られること、さらにそこでの「想像力」も、現代とは異なり「古歌の記憶や古歌に対する知識を基盤として生まれるもの」であることを学習した。

「花は盛りに」のみを読んでみると、従来の教材解釈が陥っていたように、現代とは異なる「筆者のものの見方」の特徴について、教師も学習者も捉えそこなう恐れがある。よって本実践では、同じ時代の複数のテキストについて、それぞれの情報をグラフ上に可視化するなどして読み比べた。結果、この「比べ読み」活動は当時の文脈に即して「筆者のものの見方」を「的確にとらえ」る上で大きな意味をもつものであることが分かった。これが本論文における成果である。

最後に本論文の課題を述べる。上記のような複数のテキストを読み比べる学習過程を経て、本実践では「兼好の美意識について、我々の自然についての美意識と比較しつつ意見を述べてください」という課題を出した。そこで明らかになったことは、学習者の大半は“昔の人は現代人と違い「見えない風景を想像することで情趣を感じる」という美意識を持っていた”という知識の習得段階にとどまっており、そこから自らの「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」ところにまで至っていないことである。中教審の答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」平成28年12月）でも、古典教育の課題として、社会や自分との関わりの中で古典を生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことが指摘されているように、古典教育において必要なことは、授業で学んだ“現代とは異なる「筆者のものの見方」”をどのよう

に学習者との関わりの中で生かしていくかを考えることである。本実践では、そうした活用の学習をレポートのみで終わらせてしまったのが反省点である。この改善策としては、自分との関わりの中で「筆者のものの見方」を生かしている学生レポート（【学生レポート例】）をもとにグループで話し合い、再度、我々の自然についての美意識と比較させる活動などが考えられる。こうした反省も踏まえ、次年度は高等学校において本教材の実践を行いたい。

注

注1 三木紀人『徒然草（三）全訳注』（講談社学術文庫、1982.5）

注2 「対談 定家の継承者」ゲスト・藤平春男、聞き手・佐佐木幸綱（佐佐木幸綱『中世の歌人たち』日本放送出版協会、1981.4）

注3 藤平春男「Ⅱ藤原定家」（『藤平春男著作集 第1巻』笠間書院、1997.5）

注4 岡崎真紀子・千本英史・土方洋一・前田雅之編著『高校生からの古典読本』（平凡社、2012.11）

- 『徒然草』は新編日本古典文学全集（小学館）により、『正徹物語』は小川剛生訳注『正徹物語』（角川ソフィア文庫）によった。引用にあたり、ひらがなを漢字にするなど表記を改めた箇所がある。
- 本論文は、科学研究費補助金・基盤（B）「中等国語科における批判的読解力の診断評価システムの拡張と活用による授業改善」（課題番号：15H03503、代表者：間瀬茂夫）で行った共同研究（高等学校班：間瀬茂夫（広島大学）、河野智文（福岡教育大学）、武久）の成果によるものである。

<p style="text-align: center;"><b>A</b> 正徹の世界</p> <p>正徹は、「室町時代で最高の評価を得た歌人」とも言われ、一万首を超える膨大な数の和歌を残しています。以下、正徹の歌風の特徴について述べた文章を引用します。</p> <p style="text-align: center;">※</p> <p>藤平 正徹が詠おうとする世界はいつも（中略）生の自然そのものでない幻覚の世界に浮かんできた自然ですね。（中略）そのいい例でもう一つ、巻十四にある歌です。</p> <p>山はただ面影ぞ見しかたの暮れゆくまに目路はたゆれど これは、「海や山の光景はひたすら目に浮かぶ映像として生きている。眺めていた海や山は、日が暮れてゆくにつれて全く見えなくなった。現実に見えていた海や山は見えないが、しかしそれらは、実は現実に見えなくなつたとき、面影としてほんとうの美しさが生きはじめた」ということなんです。そういう世界を歌でとらえ得るのだということを何で知つたかという、定家を知り、『新古今集』を熟読して、短歌という表現形式がそういう世界をとらえ得ることを知つたのだと思います。</p> <p>佐佐木 想像力を作歌の方法の中核に据えたのが、文学史的に見ての定家の偉大さと言ってよいのですが、たしかにおっしゃるとおり、正徹は、定家のその辺りを意識的に継承しようとしているところがある。彼も日常的な目玉を信用していない。個人における現実体験の限界を知っていた。（中略）</p> <p>藤平 （前略）本和歌以外に、もう一首例歌をあげて）これは外側の世界の印象を直叙しようという歌とは違う。自分の心のなかにとらえた世界を歌として造形しようとしているんですね。閉ざされた内部の精神的な世界を深めていこう——この傾向は中世の和歌全体にある程度共通してみられると思うのですが、平安朝の王朝の歌人の歌はそういう傾向はあまり顕著じゃないのです。それだけ、中世の歌人の歌というのは観念的だということになるのかもしれない。</p> <p>佐佐木 生ま身が生きている現実世界に、王朝の人たちよりは期待を持っていないという、簡単にいってしまえばそういうことですね。</p> <p>藤平 そういうことですね。</p> <p style="text-align: right;">（「対談 定家の継承者」ゲスト・藤平春男、聞き手・佐佐木幸綱 佐佐木幸綱『中世の歌人たち』日本放送出版協会、一九八一・四）</p>
--

## B 藤原定家の世界

藤原定家は、『新古今和歌集』撰者の一人であり、鎌倉初期歌壇の第一人者です。正徹が継承しようとした藤原定家の方法とは、現実に見えている風景をそのまま歌に詠むのではなく、想像力（和歌の伝統を学ぶ（『古歌をたくさん記憶する』）ことで身に付けた和歌的表現や美意識が想像力の源泉）を通じて得られた「自分の心のなか」の世界を、歌として造形していくことでした。以下、こうした定家の作歌方法をより具体的に説明するため、定家の代表歌の一つ

### 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のたま屋の秋の夕暮（『新古今和歌集』秋）

（目の前には）海辺の粗末な小屋が並ぶ秋の夕暮よ

について述べた文章を引用します。

※

中世の文化の中心は和歌でした。貴族（公家）も僧侶（寺家）も、そして武士（武家）も和歌を詠むのです。和歌は藤原定家の歌がそうであるように、実際に見た風景など詠みません。古い歌（古歌といえます）の言葉を新たに組みなおして和歌に仕立て上げるのです。これはもう『古今集』の時代からその傾向がありました。中世に入ってから、ほぼそうになりました。定家も一人海岸に立ってあの歌を詠んだのではなく、『源氏物語』『明石巻の一節や、「春秋はすぐすものから心には花も紅葉もなくこそ有りけれ」』『貫之集』『紀貫之』、「春は花秋は紅葉とちりはててたかかくるべきこのもともなし」』『拾遺集』『よみ人しらず』を思い出しながら、詠んでいるのです。つまり、現実の風景よりも和歌で詠まれた幻想の風景の方が、彼らにとっては価値があり、リアルなものだったということです。（岡崎真紀子・千本英史・土方洋一・前田雅之編著

『高校生からの古典読本』平凡社、二〇二二・一一）

注1 身は春秋を経過するものの、心にはすぐ色の変わる花も紅葉もなく、季節に関係なくあなたを愛し続けています。

注2 春は花、秋は紅葉となって散ってしまったので、我が家には立ち隠れるべき木のもともありません。